様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月　３ 日現在

機関番号：１２１０２
研究種目：若手研究
研究期間：2018～2020
課題番号：１８Ｋ１２４１９

研究課題名（和文）日本語教育における読字能力の評価尺度の作成に向けた基礎研究

研究課題名（英文）Basic Research for the Development of a Scale for Evaluating Orthoepic Competence in Japanese Language Education

研究代表者
伊藤　秀明（Ito, Hideaki）

筑波大学・人文社会系・助教

研究者番号：７０８０２６２７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、まず、CEFR/JFSに記述された言語活動能力と言語構造的能力の能力記述文に対してレベルごとの分析を行い、A1レベルからC2レベルの読字能力の評価尺度案を作成した。次に、作成した読字能力の評価尺度案を基に日本語学習者を対象とした日本語力とCEFRおよび本研究で作成した読字能力の評価尺度案に対する自己評価調査を国内１ヶ所、海外3ヶ所で行った。そして、日本語力と自己評価の相関分析を行った結果、国内のデータでは３つのテストそれぞれのスコアおよびテストの合計点と読字能力の能力記述文の間で読字能力を含む３つ以上の項目で中程度以上の正の有意な相関が確認された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
CEFRやJF日本語教育スタンダードでは読字能力を言語構造的能力として認める一方で、その具体的な内容や評価尺度については述べていない。
そこで、本研究では、CEFRの言語熟達度という基準に沿いながら、日本語の読字能力としての評価尺度案をA1からC2レベルで作成した。そして、その評価尺度案をもとに日本語力と自己評価調査を行った結果、国内データでは日本語力と読字能力の能力記述文の間で読字能力を含む３つ以上の項目で中程度以上の正の有意な相関が確認された。このように、これまで明らかにされていない日本語の読字能力の評価尺度を示し、日本語力との相関を調査したことは学術的、そして社会的意義のある成果である。

研究成果の概要（英文）：In this study, we first conducted a level-by-level analysis of the ability statements for language activity ability and language structural ability described in the CEFR/JFS and developed a draft scale for reading ability from A1 to C2 levels. Next, we conducted a self-evaluation survey of Japanese language proficiency and the CEFR and the draft of the reading ability evaluation scale based on the draft of the reading ability evaluation scale in one domestic and three overseas locations. As a result of the correlation analysis between Japanese language proficiency and self-evaluation, this results confirmed a positive and significant correlation of more than moderate level between the scores of each of the three tests and the total score of the tests and the ability description of Orthoepic competence in the data in Japan for more than three items including Orthoepic competence.

研究分野：日本語教育学

キーワード：言語スタンダード　CEFR　読字能力　評価尺度　文字　漢字

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

日本語の表記は大きく分けて、ひらがな、カタカナ、漢字の 3 種があり、多くの学習者にとって、この多様な文字体系の習得およびそれに対する評価が初級日本語学習への動機づけを大きく左右する（伊藤他 2016）。また熊野他（2013）では、日本語で課題遂行型の試験を行う際に、表記に関わる能力不足からタスク遂行やその評価に問題が生じる場合があることが述べられており、読字能力の評価尺度の欠如が他の能力を評価する試験においても内容的妥当性を揺るがす場合が観察されている。

文字に関わる読字能力または書字能力については、近年盛んに言語教育の現場で利用されている言語教育スタンダード『Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment』（以下、CEFR）や「JF 日本語教育スタンダード 2010」（以下、JFS）において、書字能力は「正書法の把握」、読字能力は「文字で書かれたものを正しく発音する能力」とその存在が認められている（Council of Europe 2004：129）。しかし、能力は認められているものの、評価尺度となるような具体的な能力記述文は示されていない。このような背景から、言語教育スタンダードと文字との関連に関心を持った研究として古川（2010）と加納（2014）があるが、古川（2010）は読む活動を行うためのテクストタイプからどのような漢字語彙を知っている必要があるか、という点について述べており、言語構造的能力としての読字能力に迫る研究とは根本的に異なる。また、加納（2014）も学習者の漢字の知識を Can-do Statements で表そうとしている点は非常に新しい試みであるが、Can-do Statements の内容が「「元気」「不便」「有名」など、やさしいナ形容詞の漢字が読める」など、近年の言語スタンダードにある課題遂行としての Can-do Statements とは異なり、学習者の知識を問うものとなっている。これらの点で古川（2010）、加納（2014）の研究も本稿が焦点としている課題とは異なっている。

欧州の大学などでは、CEFR というアルファベット言語が中心である国際的な言語スタンダードの評価尺度に沿って教育の到達度を示すことが求められており、海外の日本語教育現場では独自の文字体系をもつ日本語の読字能力をその中で位置づけていく必要がある。また、日本語使用者が様々な国や地域で活躍する現在、読字能力の正当な評価尺度の提示は、今後、より求められていくと考えられる。以上の点からも、日本語の読字能力の記述化は急務の課題であった。

２．研究の目的

本研究はこれまで明らかにされていない日本語教育における読字能力の評価尺度の作成に向けた基礎研究であった。そのため、(1) CEFR/JFS に記述された言語構造的能力から熟達度レベルの特徴を客観的に抽出し、読字能力の評価尺度の試案を作成・精緻化する、(2) 精緻化した試案を用いて国内外の学習者を対象に自己評価調査を行うことで、試案の妥当性を明らかにする、の２点を本研究の研究目的とした。

３．研究の方法

本研究は研究目的（1)、(2）に沿い、CEFR/JFS に記述された言語構造的能力を KH Coder を用いてテキストマイニングを行い、頻出語や抽出語の共起ネットワークから客観的にその熟達度レベルの特徴を抽出し、評価尺度を精緻化した。そして、日本国内外の学習者を対象として、筑波大学のオンライン日本語テスト TTBJ の SPOT90+Grammar90+漢字 SPOT50 の受験と CEFR の言語活動能力と言語構造的能力に精緻化した読字能力の評価尺度試案を含めた自己評価調査を行い、読字能力の評価尺度試案の妥当性を日本語能力の熟達度レベルとの関連性から検証することを目指した。

（１）2018 年度は CEFR/JFS に記述された言語構造的能力の能力記述文をレベルごとに抽出し、KH Coder でレベルごとの能力記述文の頻出語の抽出や共起ネットワーク分析を行った。この分析により、各熟達度レベルの特徴を抽出し、伊藤（2017）の先行研究をもとに評価尺度案の精緻化を行った。そして、A1 レベルから C2 レベルまでの読字能力の評価尺度案を作成した。

（２）2019 年度は 2018 年度に作成した A1 レベルから C2 レベルまでの読字能力の評価尺度案を基に日本語学習者を対象としてオンライン日本語テストによる日本語能力調査と自己評価調査を国内（大阪）１ヶ所、海外（ウズベキスタン、台湾）２ヶ所で開始した。なお、海外の調査については新型コロナウイルスの影響により渡航ができなかったため、現地の先生に協力により実施した。

（３）2020 年度は、日本語能力調査と自己評価調査のデータの追加と分析を行った。データは前年度までに得たデータに加え、現地の先生に協力してもらい、海外１ヶ所（エジプト）のデータを新たに収集した。そして、収集したすべてのデータを基に、日本語能力と自己評価の相関を分析した。

４．研究成果

「３.研究方法」の（１）から（３）についての研究成果は次の通りである。

（１）伊藤（2017, 2019a）が行なってきたCEFRの読字能力の能力記述文の試案の再検討を行った。その結果、伊藤（2017）の試案よりも客観的な手法で読字能力の能力記述文を示すことができた。C2レベルに関しては、C2レベルで挙げられている能力記述文の少なさから共起ネットワーク分析が行えなかったため、伊藤（2019b）の視覚的受容活動で重視される能力から推測し、軽微な修正を行った。これにより、本研究で得られた結果と伊藤（2019a）のA1、A2レベルの結果を組み合わせることで、伊藤（2017）で示された試案よりも客観的な読字能力の能力記述文を提示することができた。

表１　本研究によって明らかにした読字能力の能力記述文

C2	一貫して正しい読みをし、文学などで使われる難読漢字なども読むことができる。
C1	語彙レベルの些細な誤りもあるが、専門分野などで使用される言語表現や語彙を正確に読むことができる。
B2	高い読字能力を持っており、一般的な語であれば正確に読むことができる。
B1	明らかな間違いを犯す場合もあるが、割合正確に日常的な話題など幅広い内容に関する文字について読むことができる。
A2	繰り返し読んだり、読み間違えたりする場合も多々あるが、日常の状況で必要な基本的な語彙であれば、読むことができる。
A1	学習済みで当人の個人的情報に関わる基本的で具体的な限られたレパートリー(単語や言い回しなど)であれば、読むことができる。

（２）日本国内のデータは大阪の日本語学校で収集し、15人分の有効データを収集した。また、海外については新型コロナウイルスの影響により渡航ができなかったため、現地の先生に協力によりウズベキスタンで44人分、台湾で4人分の有効データを収集した。

（３）現地の先生に協力に得て、エジプトで新たに34人分の有効データを収集した。そして、TTBJの結果（SPOT90、文法90、漢字50）と能力記述文の自己評価との相関分析について、データ収集場所ごとにノンパラメトリックを仮定した順位相関係数であるSpearmanの順位相関係数（Spearman's rank correlation coefficient）を適用して解析を行った結果、国内のデータでは３つのテストそれぞれのスコアおよびテストの合計点と読字能力の能力記述文の間で読字能力を含む３つ以上の項目で中程度以上の正の有意な相関が確認された。一方、台湾のデータはデータ数の少なさなどにより分析ができず、ウズベキスタン、エジプトのデータでは有意な相関は確認できなかった。

表２　国内のデータから有意な相関が見られた項目

テスト名	中程度の相関が見られた項目	強い相関が見られた項目
テストの合計点	総合的な口頭発話、包括的な聴解、一般的な使用可能言語の範囲	読字能力
SPOT90	総合的な口頭発話、包括的な聴解、一般的な使用可能言語の範囲、読字能力	
Grammar90	総合的な口頭発話、包括的な聴解、一般的な書かれた言葉でのやり取り、読字能力	一般的な使用可能言語の範囲
漢字SPOT50	総合的な口頭発話、包括的な聴解、読字能力	

また、国内データの結果をTTBJのテスト分類を軸に見てみると、３つのいずれのテストにおいても「総合的な口頭発話」「包括的な聴解」「読字能力」で正の有意な相関が確認され、本調査で使用したTTBJのテストセットはCEFR基準の「総合的な口頭発話」「包括的な聴解」「読字能力」を測るテストとしても機能する可能性があることが示唆された。

そこで、TTBJのSPOT90、Grammar90、漢字SPOT50の初級、中級、上級などの目安と自己評価の関係性を調査した結果、Grammar90が中級レベルであるとBレベル以上と自己評価している傾向が見られ、SPOT90、Grammar90、漢字SPOT50の合計点が170点程度からBレベル以上であると自己評価をしている様子がうかがえた。

表 3　国内データの TTBJ の各テストの得点解釈レベルと自己評価の対応

番号	SPOT90	Grammar90	漢字 SPOT50	合計点	最も選択した熟達度
1	中級	中級	上級	208	B2
2	中級	中級	上級	207	C1
3	中級	中級	上級	199	B2
4	中級	中級	上級	189	B1
5	中級	中級	上級	188	B1/B2
6	中級	中級	上級	180	A2
7	中級	中級	初級	169	B1
8	中級	初級	上級	166	A2
9	中級	中級	初級	166	A2/B1
10	中級	中級	上級	157	A2/B1
11	中級	初級	上級	156	A1
12	中級	初級	上級	148	A2/B2
13	初級	初級	中級	137	A1/A2
14	初級	初級	中級	137	A2
15	初級	中級	入門	108	B2/C2

＜引用文献＞

伊藤秀明（2017）「拡張・精緻化のための読字能力の能力記述文試案作成–CEFR／JFS の言語構造的能力を参考に–」『日本語教育』168 号，pp.55-62.

伊藤秀明（2019a）「読字能力の評価尺度の再考―「基礎段階の言語使用者」に注目して―」『基礎教育保障学研究』3，64-78.

伊藤秀明（2019b）「CEFR の受容的活動では何が重視されているのか―視覚的な受容的活動の各レベルの分析―」『日本語教育』173 号，69-77.

伊藤秀明・石井容子・前田純子・山下万吉（2016）「漢字を楽しむアニメーション動画制作の試み」『日本語教育方法研究会』22（3），30-31.

加納千恵子（2014）「漢字に関する Can-do Statements 調査から見えてくるもの―漢字の知識と運用力についての学習者意識―」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』29 号，71-92.

熊野七絵・伊藤秀明・蜂須賀真希子（2013）「JFS/CEFR に基づく JFS 日本語講座レベル認定試験（A1）の開発」『国際交流基金日本語教育紀要』9 号，73-88.

国際交流基金（2014）『JF 日本語教育スタンダード 2010 第 3 版』独立行政法人国際交流基金

古川嘉子（2010）「生活の中で読む活動と漢字語彙との関係を考えるワークショップ―「言語のためのヨーロッパ共通参照枠」（CEFR）を使って日本語の特徴を考えてみましょう―」『JSL 漢字学習研究会誌』2 号，15-20.

Council of Europe（2004）『外国語の学習，教授，評価のためのヨーロッパ共通参照枠』吉島茂・大橋理枝（訳・編），朝日出版社

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 伊藤 秀明	４．巻 3
２．論文標題 読字能力の評価尺度の再考－「基礎段階の言語使用者」に注目して－	５．発行年 2019年
３．雑誌名 基礎教育保障学研究	６．最初と最後の頁 72-86
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.32281/jasbel.3.0_72	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 伊藤 秀明	４．巻 173
２．論文標題 CEFRの受容的活動では何が重視されているのかー視覚的な受容的活動の各レベルの分析ー	５．発行年 2019年
３．雑誌名 日本語教育	６．最初と最後の頁 69-76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 ITO Hideaki	４．巻 10
２．論文標題 Orthoepic Competence Descriptors in Japanese Language Education: CEFR Levels B1 to C2	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Acta Linguistica Asiatica	６．最初と最後の頁 49～66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.4312/ala.10.1.9-26	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 伊藤秀明
２．発表標題 「基礎段階の言語使用者」の読字能力評価尺度の作成
３．学会等名 基礎教育保障学会 第3回研究大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 Hideaki Ito
２．発表標題 Investigation of Orthoepic Competence Assessment in Japanese Language Education
３．学会等名 INTERNATIONAL SYMPOSIUM "TSUKUBA DAY IN PULA"
４．発表年 2018年

１．発表者名 伊藤秀明
２．発表標題 日本語教育におけるCEFRの受容と課題
３．学会等名 The 2nd Scientific-practical teacher training seminar for Japanese teachers Tashkent
４．発表年 2019年

１．発表者名 伊藤秀明
２．発表標題 日本語教育における読字能力の評価尺度の検討－テキストマイニングによる分析から－
３．学会等名 協働会議「文化・民族・言語の多様性とその学際的研究
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関